



report 01

13万匹のサケの稚魚放流を終えて

NPO 法人新潟水辺の会 副代表 石月 升

数日間続いた「寒のもどり」を思わせる肌寒い天気が一変して、幻想的な川霧の天井から溢れるばかりの春陽が降り注ぎ、越後妻有と北信濃にも春がやってきた。

3月初旬の8、9日の両日、昨年に引き続いてのサケ稚魚環境放流の日である。初参加の黒埼ボーイスカウトの仲間たちを乗せたマイクロバスは、最初の放流地点である西大滝ダム下流（野沢温泉村）に到着。除雪のために捨てられた雪の山に囲まれての開会式の後、スキー場のスロープのように整備された雪道に、66名の大人が一列に並んで稚魚のバケツリレーである。

水際で待ち構えた地元の小学生や幼児たちのバケツに移された稚魚3万匹は、「放流開始」の合図とともに一斉に千曲川に放たれた。

水槽での生活から解放された稚魚たちは、最初とまよっていたが、子供たちの「帰って来いよー」の掛け声に促されるように、やがて下流に向かって泳ぎだした。

稚魚放流数3万匹、放流イベント参加者85名、西大滝ダムにおける成果である。

宮中ダム下流（十日町市）、稚魚放流数4万匹、放流イベント参加者45名

犀川（長野市）、稚魚放流数3万匹、放流イベント参加者87名

千曲川『千曲市』、稚魚放流数3万匹、放流イベント参加者134名

合計、稚魚放流数13万匹、放流イベント参加者351名、いずれの会場も昨年を上回る成果だった。

十日町市立上野小学校児童が校長、教頭が引率して初参加、また、当会のホームページを見た埼玉県の一家6名が、千曲川（千曲市）の放流に参加するなどのうれしいニュースもあった。

参加した大勢の子供たちの声援に応じて、3～

4年後にたくましい姿に成長したサケが遡上してくることを期待したい。



西大滝ダム下流（野沢温泉村）での稚魚のバケツリレー

ところで、当会の稚魚放流について「放流された稚魚は発電所のタービンに吸い込まれて死滅するので、子供たちの教育上好ましくない行為だ」として反対する意見が一部にある。

取水ダムの迷入防止装置に誘導されて、魚道を下降する稚魚や、タービンを通り抜けても生存している稚魚が皆無とはいえない。当会はただ漫然と放流しているだけでなく、迷入防止装置の機能向上や、下降、遡上時の放流水量の増量や魚道の改善などを要請しながら放流を続けようとしていることを理解して欲しいものである。

信濃川におけるサケ稚魚の生存・遡上率は0.1%程度とされている。生存率のみを重視すると一般河川での放流も好ましくない行為となる。

多くの流域の市民に当会の稚魚放流の意義を訴えながら、稚魚の下降速度や、タービンに対する抵抗力など未解明の問題を究明していきたい。

サケの放流プロジェクト参加の皆さんからの感想

【十日町市立貝野小学校の皆さんより】

「願いをこめたさけの放流」

五年 羽鳥日香里

三月八日に、さけのち魚を放流しに、ミオンなかさとへ行きました。さけのち魚を放流するのは初めてだったので、行く前、とてもワクワクしました。

放流する時、さけのち魚を見たら、私の想ぞうとは、すごくちがいました。さけのち魚は、ドジョウみたいに黒かったです。私は、さけのち魚は、うろこが銀色でふつうのさけみたいだと思っていたので、びっくりしました。

いよいよ川に放流する時、岩とち魚の色がにっていたので、さけをふまないように気をつけました。そして、さけが泳いでいるのを見たら、元気よく泳いでいたので、私も気持ちよくなりました。

さけは大人になって、三年くらいたったら、信濃川にもどってくるそうです。放流した所にまたもどってくるなんてすごいと思いました。三年くらいたって、またもどってきたさけを見たいです。



「はじめてのさけのほう流」

四年 村山綾花

わたしは、はじめてさけのほう流にさんかしました。

たくさんのおさけの赤ちゃんがいました。さけの赤ちゃんは、今まで見たことがなかったので、小さいなと思いました。こんなにちいさいさけが大

きくなって、食べられるなんてかわいそうだと思います。

バケツのち魚を、川にそうとながしました。全部信濃川に流しました。何年か後に、またもどってきてほしいです。はじめてほう流したから、楽しかったです。

「楽しかったさけのほうりゅう」

三年 猪股俊宏

ぼくは、はじめてさけの赤ちゃんを見ました。ぼくがさけを流した回数は、五回でした。全ぶで四万びきくらいいました。さい後に、会長さんから、さけを大切にしましょうというお話がありました。

帰る時、お父さんが、「さけは頭がいいから、ちゃんとしなの川にもどってくるよ。」と言っていました。さけが、また同じ川にもどってくるなんてすごいと思いました。

【日本ボーイスカウト連盟黒埼第一団の皆さんより】

“カムバック サーモン” サケの稚魚市民環境放流に参加して

三月八日に初めてサケの稚魚の放流に参加させていただきました。小さな稚魚でしたがとても生命力があり、四年後には必ず帰ってくると思いました。でも、この大切な故里の川にはいくつものダムがあり、海へ行くことも、また大きくなって帰ってくることも容易な事ではないようです。人間の都合で作ったダムには本来あるべき魚への心遣いが無いように思いました。

魚道があっても段差が大きすぎたり、ヘアピンカーブのようになっていたりしました。

私にはどうしても魚が通れるようには思えません。ダムを造るときに自然に生きる生物の立場に立って考えてあげられたらと思いました。普段なにげなく食卓にあげているサケでしたが、とても苦勞して川から海へ行きまた川へ戻ってきて子孫を残し続けていることを、改めて知ること



report

サケの放流プロジェクト参加の皆さんからの感想



ができました。

ボーイ隊 石田ムツ

初めてサケを放流しました。思ったより小さくてたくさんいました。このサケが生まれた川を覚えていて戻って来てくれるのは「すごい」「うれしい」です。

カブ隊 鈴木 真帆

私たちの放流した13万匹の稚魚のうち1000分の1くらいしか戻って来ることができないと聞き少しがっかりしました。もう少し多く帰ってくればいいなと思いました。

カブ隊 阿部 凜

新潟では雪が全然無かったのに十日町ではほくの身長より高くあって驚きました。

カブ隊 大橋 礼世

【埼玉県から参加の小林さんご一家】

素晴らしい体験を有り難うございました。

本当に素晴らしい体験をさせていただきました。埼玉県から1歳、3歳、6歳の子どもたちと初めての参加でした。もちろん子どもたちは稚魚放流大変喜んでおりました。私の住む町にも川はありますが護岸はコンクリートで覆われ、川に落ちないように柵がめぐらされています。生活排水も流れゴミも捨てられているのが現状です。それでも川にはいろいろな魚たちがいるのでしょうか、

子どもたちが川辺で遊んだり、ましてや稚魚を放流するなど想像すらできません。稚魚が元気に川に戻っていくことを純粋に喜んでおりましたが、放流後も川でずーと遊んでおりました。

遊具やおもちゃなど物がないと遊べない子どもたちが増えていると聞きます。うちの子供たちも例外ではなく、お店に行けば「あれ買って」「みんな持っているよ」「ビデオ見ようよ」などばかりです。



そんな子どもたちが何もない川で延々と遊んでいました。帰りに6歳の長女と3歳の次女が「お魚死んじゃうから川にゴミ捨てちゃ駄目だよ」「そうだね」などと話をしていたびっくりしました。

今回稚魚放流というかたちで参加させていただきましたが、親である私は水族館で魚を観察するように稚魚のことばかり考えていましたが、子どもたちは自然の中で遊んだことが楽しかったようです。

身近な自然で遊ぶことがないと環境問題など考えることはできないのだと思いました。川も含めて自然のなかで生かされていることを感じる事が出来ました。本来なら地元の川も含めて全国どこでも稚魚放流ができるようなきれいな環境になればと願います。来年も是非参加できればと考えております。本当に有り難うございました。

埼玉県上尾市 小林 誠 美歌子 真実 春木 奏木

(注：所属、学年は原稿執筆当時のまま原文を掲載しています。)

サケが遡上できる川づくりに向けて 長岡市栖吉川にサケの稚魚 1 万匹を放流

平成 20 年 3 月 1 日 (土) 信濃川水系栖吉川の下流 (長岡市中瀬橋付近) で、冷たい小雨が降る天候でしたが、町内の住民・子ども・親子連れ約 80 名が参加され、サケの稚魚 1 万匹の放流を行いました。



同地区では、15 年前から、住民が栖吉川の草刈りやゴミ拾いなどを行い、環境美化に取り組んでおり、サケの稚魚の放流も、きれいな川を守り続けてほしいとの願いから実現したものです。

この催しのきっかけは、平成 19 年 12 月 4 日の新潟日報朝刊に「栖吉川にサケ遡上」との見出しで、ここ数年来サケの遡上が栖吉川で確認されていることが掲載され、宝 1 丁目町内会の宮島秀二さんが、「ぜひ、栖吉川下流にある黒条地区で、サケの稚魚を放流し、豊かな自然環境を次代の子ども達に伝えたい」との強い想いから、長岡市河川課、新潟水辺の会に相談され、信濃川ファンクラブも協力して放流を行なうことになりました。

しかし、サケの稚魚の放流は、町内会をはじめ、黒条地区としては初めての試みであることから、何をどのように進めて良いか大変不安でした。

そこで、サケの稚魚放流の経験のある新潟水辺

の会の森本さん、加藤さんに急遽お願いし、1 月 22 日 (火) に初会合を行いました。

その後、関係する組合・団体・行政と調整して、2 月 14 日 (木)、地元有志が集まり、黒条地区コミュニティセンターでサケの稚魚放流に関する説明会を開催し、3 月 1 日の開催に向けて準備を進めてきました。

放流するサケの稚魚は、寺泊漁協様のご協力により、サケの孵化場で育てられた生後 4 ヶ月ほどの体長 4cm の稚魚 1 万匹を提供いただき、また、サケの生態系や放流の仕方について、新潟県内水面水産試験場資源課よりアドバイスをいただきました。

当日朝 10 時、寺泊から運ばれてきた稚魚を、参加者全員でトラックに積まれた水槽からバケツリレーで川辺まで運び、子ども達は、稚魚をやさしくいたわるように川にそっと放して、深場にもぐり見えなくなるまで、稚魚を見つめていました。

参加した皆さんからは「初めての経験で、楽しかった」「放流したサケが大きく元気になって、4～5 年後に元気で戻ってくる姿を見たい」など、息を弾ませて笑顔で話をされていました。

以前、この栖吉川では、川崎小学校の生徒がサケの稚魚を放流した経緯があり、市内の別の場所を流れる柿川でもサケの遡上が確認されています。

信濃川ファンクラブとしては、地域の皆さんが、川の自然環境や保全の大切さについて、少しでも理解してもらえるための啓発事業や流域づくり、人づくりを通じ、地域に貢献してまいりたいと考えておりますので、今後とも新潟水辺の会の皆様のご指導をよろしく申し上げます。

最後に、むやみに稚魚を放流することは、自然の生態系や管理上の問題等がありますので、きちんとした対応をすることが必要です。

今回のサケの稚魚放流は大変勉強になりました。

信濃川ファンクラブ 事務局 田中 克美



信濃川における無水区間の現地調査に関わって(1)

昨年の夏、数回にわたって十日町市から新潟・長野県境をまたいで信濃川・千曲川・犀川沿いに松本市まで、サケの復元にかかわる信濃川水系の調査に同行させてもらうことができた。

無水区間・減水区間の実態調査という名目だったが、まずはその実態を見て相当なショックを受けた。十日町橋付近から見る信濃川は、広い川幅に対して流路が狭く、また、その水深も浅く、日本一の大河とは思えない流れだった。その姿は「痩せ細った」とでも言おうか、不健康な印象で、大きな違和感が私の心に残った。

宮中ダムの直近まで行くと、その上流と下流の水量の差に愕然とした。満々と水を湛えた上流側と、大部分を取水されて細々と流れる下流側のギャップにはただ驚くしかなかった。

西大滝ダムの状況も同様で、上流側の豊富な水量とは裏腹に、下流は流量の少なさゆえに、河床のごつごつした岩肌がむき出しの急流のようになっていた。山間部のために流路が深さを持っていたため、水深はそれなりに深かったが、一見して本来の姿ではなく、不自然な流れだと思った。

犀川に入り、無水区間の状況を目にしたときは本当に驚いた。淀んだ水が無表情に淀んでおり、生氣のようなものは感じられない。苔と泥で汚れた河床は死んでいるようにさえ見えた。更にショックを受けたのは、その水温の高さだ。測量のために水溜りに入ると、風呂のような、お湯と呼んでいいような水が肌に触れた。自然環境・川の生態系を何と考えているのかと思った。昨年の夏は記録的な猛暑で、水が流れている区間の水温も決して低くはなかったが、35°Cに迫る水温など自然にあってはいけないだろうと、憤りを感じた。

調査のメインとも言うべき測量の作業では、現場の厳しさと言おうか、授業の測量実習で学内の敷地を測量するのは全く違う種類の作業のような感想を持った。

まず、測点選びの難しさである。測量実習と違い、自然の創造物である河床では、勾配の変曲点を見極めるのが困難で、径の大きな岩石で足場も

悪いため、測点間の距離や標高が思ったようによれず、苦勞した。

加えて、夏の日射しにも悩まされた。測量を行った正味2日間で、私の肩回りや背中中の皮膚は実に2回も剥けてしまった。体力の消耗も激しく、よく体調を崩すことなく調査を終えることができたなどと思う。

流水の中での測量という作業も、体制を維持するのが難しく、これも著しく体力を消耗する要因だった。昔取った杵柄ではあるが、スポーツをやっていたこともあって、転倒して流されるという事態は避けられたが、改めて川の危険性を認識した。このような苦勞や感想と共に、測量結果を持ち帰り、プレゼンテーションのためのまとめ作業を行った。測量の作業中にも感じていた測点の選び方の難しさは、結果を計算、数値化する作業の中で、改めて思い知らされた。微妙な河床の形状も、測量しなければ前後の測点を結ぶ直線に隠れてしまう。測点間の距離や、流速を測定した位置により、「断面を代表する点での流速」という建前にそぐわない断面になってしまったこともあった。

流量を推定する際の計算過程では、n値(水の流れ難さを表す値で、粗度係数といわれる)一つをとってもその設定値によって結果が2倍にも膨れ上がったり、逆にn値を調整してしまえば公表された流量に沿う値を出すことができてしまったりと、目的と手段が入れ替わってしまうような場面もあり、罪悪感を覚えたりした。例えば治水計画の基本となる、ダムなどの洪水調節がない状態で流出してくる流量を表す「基本高水」という値がある。精度が違うだろうが、国土交通省による基本高水の設定の際なども、このような恣意性はやはり否定できないだろうと思った。自然やランダムな要素を多く含むものの定量化には、幾度となく検討、吟味することが求められ、高い倫理観も同時に求められるのだなと思った。

アップアップしながらまとめた結果を、プレゼンする機会を3度も与えられたにも関わらず、その全てで準備不足が露呈し、反省しなければいけないと思った。しかも、そのうち2度は学外で一

■水辺レポート

report 04
**信濃川における無水区間の
現地調査に関わって(2)**

般の方を前にしての発表で、本当に自己嫌悪に陥ってしまった。

その2度の発表の場では、参加人数が思っていたよりも多く、特に十日町市でのシンポジウム(2008年1月13日)では、一般の方の参加人数が、意識の高さを表しているなどと思った。

そのシンポジウムの関係者の方たちから聞いた話の中で、宮中ダムからの取水が地震で止まった際、代替電力を金で解決し、山手線は動いていたことについて、「地元の宝を首都圏の公共の福祉の為と捧げていたのに、金で替えられる問題だった。その事実には悔しさは拭えない。」と話されていた方がいた。JRにとっては、あの事実は実際、「不都合な真実」だっただろうと思う。

調査に関わって思うことは、やはり川というのは、人間、ましてや企業の利潤の為に減水区間や無水区間を作っているものではないなということだ。川は発電のための水路ではないし、生態系をそのためにないがしろにしている理屈はどこにもない。

水利権の更新期間が30年と長いことや、過大ではないかと言われ続けている基本高水を国土交通省が引き下げないのは、彼らの怠慢や、問題意識の低さを表していると言ってもいいのではないかと思う。高度成長の時代にダムが作られて、その当時「川は人間のためにある」といったような考えがあったとしても、もう今はそのような考えが通用するわけがないのだ。問題を認識しているのであれば早急に対応してもらいたいと思う。

樋熊清治先生がおっしゃっていた、「継続して活動しなくては意味がない」という言葉通り、この活動にまた関わる機会を与えてもらえるならば、積極的に参加していきたい。

また、そのときは、今回感じたことや反省を踏まえて、正確に実態を把握し、伝えられるようなスキルを磨いていきたいと思う。

新潟大学工学部建設学科 別部 拓生
(新潟水辺の会学生会員)

report 05
**第5回「身近な水環境の全国一斉調査」
参加者募集**

今年も6月8日(日)を中心に、「身近な水環境の全国一斉調査」が行われます。この調査は、全国各地の団体や個人が同一日に、同一パッケージによる身近な河川や湖沼の水温、気温、COD(化学的酸素要求量)調査を行うものです。



新潟水辺の会も第1回より参加し、新潟県内約40団体のとりまとめを行って来ました。

第3回の調査では、新潟県内の上・中・下越・佐渡の全域に広がりました。昨年の調査には西蒲原土地改良区(99地点)が参加し、一挙に調査地点も320地点になりました。

今年も9月6・7日に行われる第28回全国豊かな海づくり大会に合わせて、新潟県内の内水面漁業協同組合も河川の調査に参加予定です。

更に佐渡では、今年の秋に予定されている朱鷺の放鳥の為に生息環境調査を行っている団体も餌場となる水環境調査を行う予定で、今年の調査箇所は400地点を越える状況です。

新潟の河川や湖沼ではまだ汚れが目立つ所もありますが、こんなきれいな河川があるのかと驚く場所も多くあります。

新潟水辺の会会員の皆様、是非この機会に身近な水環境の調査を一緒にやりませんか。

連絡をお待ちしています。

世話人 加藤 功
(電話 025-230-3910)

report
2008年3月2日(日) 越後平野リバーツアー

前日の大熊教授最終講義に駆けつけられた九州、四国、近畿、関東の皆さんとガイドの石月氏、星島氏と計19名で、新潟市万代島-大河津分水-横田切れ-蒲原大堰-阿賀野川満願寺閘門-床固め-通船川中流松崎地区川づくり-山ノ下閘門の『越後平野大河下流の水景観ツアー』を味わって頂きました。その感想を紹介します。

世話人 相楽 治



○川上聡氏(木津川源流研究所 当会会員)
「琵琶湖・淀川水系コース案内中」

すでに「名張川・木津川水先案内人」を自称し、琵琶湖・淀川水系を2泊3日、3泊4日コースなどご案内しています。水環の企画として理事を中心に呼び掛けて全国の主要水系のモデルコースづくりから始めてはいかがでしょうか？川文化の理解を深める意義も大きいと思います。

○新居照和氏(吉野川シンポジウム)
「信濃川等と吉野川との違いを実感」

大熊先生との縁で行かせていただいた新潟の旅は、広大な越後平野と、地域の歴史や地勢、信濃川と阿賀野川の歩みを感じさせていただきました。吉野川にまつわる自然条件や社会条件との違いを実感できたことが、新鮮な経験になりました。個々の流域の独自性が浮かび上がってきたり、相対化できたりする機会は、地域に暮らすものにとって大切なことだと思う旅でした。小生の生業上、車窓から、越後平野に残る民家や集落の構造にとっても興味がわいてきました。川や流域の視点から建築を見ると、暮らしや建築に対する視

野がきっと広がると感じる旅でした。次回をたのしみにしたいと思います。

○山道省三氏(NPO 全国水環境交流会 当会会員)
「越後平野リバーツアーでの感動」

それにしても、なんに驚き感動したかって一番は通船川の再整備でした。10年前、第2回川の日ワークショップでのグランプリが目の前に本物となって現れたことでした。そのときの賞には「私発協働」と評価されました。まさにその通り、汗や思いが風景になっていました。

○長野真理子さん(NPO 循環型環境・農業の会)
「先人に学ぶ経験的河川工学の旅」

ミニワゴンに乗った直後から河川研修の熱気に包まれた。25,000分の1国土基本図を貼った信濃川の破堤箇所の数々。112年前の横田切れ跡から見る遠くの現堤防など。「大河津分水可動堰は産業遺産として現地保存ができる」と惜しむ今本先生の声が今でも耳に残っている。

○姫野雅義氏(吉野川シンポジウム)

越後平野の姿を変えた大河津分水と、阿賀野川本流なきあとの通船川が心に残りました。同じ頃、同じ試みが、吉野川でもありました。この地の人びとの営みを想像し、改めて吉野川第十堰が残された意味を考えています。

最終講義と退職祝賀会(3月1日)へのお礼

大熊 孝

私の最終講義と退職祝賀会には、全国から多くの方がおいでいただき、感謝にたえません。34年間、入院するような病気にもならず元気で勤め上げることができました。優秀な学生に恵まれ、水辺に対して志を同じくする皆さんとめぐり会え、幸せな学生生活でした。これからも、みずき野ハウスを拠点に、のんびりと水と人のかかわりを探求していきたいと思えます。当面は、この8月23日に行なわれる『KODOMO ラムサール国際湿地交流 in にいがた』に力を注ぎます。今後とも、よろしくご指導ください。

■水辺レポート

report 07

最近の通船川再生活動報告 ～協力的になってきている沿川の企業～

昨年9月に行われた「つうくり市民会議」に参加を呼びかけるため、大熊会長(つうくり市民会議)と一緒に通船川沿川の企業回りをを行った。

その時、通船川沿いに大型商業施設が進出することにより、企業活動に若干の支障が生じたのではないかと、それとなく現状について意見交換をしながら30数社を廻ってきた。

たしかに、企業サイドでは、商業者の目が気になるという話の中で「つうくり活動」に少しでも協力したいと申し出る企業が出てきている。



そして今回、3月に北越製紙から通船橋左岸～山の下閘門まで清掃活動に協力してもらった。また、4月22日には旭カーボンから通船橋～焼島橋右岸と臨港貨物線脇の清掃活動に協力してもらい、新しい形で通船川や地域に企業協力につながる仕組みが少しずつ見えてきている。

特に、煙突から出る蒸気は、冬など低く垂れこみ、煙のように住民から見られ、公害ではないかと疑問視されている。煙突問題は当時空港が近く、高さ制限があり、止む無く現状の形で来たが、今回、迷惑をかけないように煙突を高くする工事が進められていると、私達に説明があった。また、住民の方に迷惑をかけないように努力していきたいと話されていた。

星島 卓美

report 08

今年の栗ノ木川桜祭りは？

今年も4月20日、快晴の下、2割位残った桜の状態でしたが、盛大に「栗ノ木川桜祭り」が開催されました。



今年も、栗ノ木川水辺の広場を観客席とし、対岸をメインステージに、沼垂小学校の生徒による万代太鼓、ストリートダンス、新潟総踊り、父兄の方によるコーラスや歌謡ショーなど、賑やかにで壮大な催しが桜祭りを盛り上げました。新潟水辺の会も、恒例の川舟の乗船体験を行い、過去最高の306人を乗船させました。会で購入した板合せ、梅八造船寄贈の板合せ1艇とカラーリングした小船2艇、船外機船1艇、横山隊長のカヌー1艇の計6艇を使用し、万代高校カヌー部の生徒や近所の元船頭の宇田さんの応援を頂き、皆さんに楽しんで頂きました。

しかし、カヌーが乗り込み時に横転し、乗船者が川に落ちるといったアクシデントがありました。これにより、携帯電話の弁償とクリーニング代を支払うこととなりました。想定はしていたものの、趣旨説明をしていなかったことや実際に落ちた後の対応を考えていなかったことは大きな反省点です。本来、遊覧船的観光事業ではなく、市民に川・水辺に親んでもらう一環としてのボランティア活動なので、今後同様の活動を行う場合は、乗船前に趣旨説明を行って指導すると共に、貴重品の預かり場所を設けるなどの対策が必要と考えます。今回の乗船体験は、水辺の会の活動で、重要な経験であったと思います。

最後に、乗船体験の指揮や落水者対応をして頂いた松野世話人を始め、協力して頂いたスタッフの皆様、本当にお疲れ様でした。

世話人 安田 幸弘

report

通船川・河口の森の現在

通船川・河口の森は河口の森ワークショップで決められたように平成15,16年に通船川ワークショップのメンバーや住民達によって2回の植樹が行われました。しかし地盤が固すぎたり土壌が廃土であったことなどで苗木の生長に不十分な条件が重なり苗木は十分な生育を果たせず現在に至りました。この失敗は自然再生を人が行う場合に事前の綿密な調査と条件作りが極めて重要であるという当たり前の事実を再確認する結果となりました。



通船川河口の森『市民サロン計画』(横山私案)



河口の森全景

河口の森の東側に焼島橋があり主に北越製紙のパルプチップの搬入路として使用されています。平成17年、新潟市から橋の架け替えの話がありその工事架設資材置き場として苗木を植えた河口の森を使用したいという話がそれに付随してあり、これにどのような対処をするのかの話し合いが昨年の末から市土木事務所、東区建設課、県地域振興事務所と住民との間で行われました。途中経過はあまり面白くないので割愛しますが結論的には現在植えてある苗木を伐採、撤去し、橋が完成した後に苗木を再植するという結論になりました。しかし再植するといっても苗床の地ごしらえをどのようにするかが森再生のポイントであることが

現在すでにわかっていることから単なる補償工事にせず山砂、腐葉土の被覆(1m~2m)の上に再植する必要があります。今後さらに協議の場がもたれることになるとは思いますが河口の森が青々とした緑に溢れるような景観を実現できるような条件を整えたいと考えています。



船着き場予定地

さて河口の森は山の下排水機場のすぐ直近上流にあり、信濃川へも近く、更に北越製紙の排水溝や付近の工場群に隣接した場所にあり、今後の通船川全体の再生を考えかつ川のもう一つの可能性を実践し行動する好条件にあります。

そこで河口の森西側末端部に舟小屋をかねた通船川全体を監視する「市民サロン」を私案しています(水道、電気、電話などの問題が若干ありますが)。1千万円ほど掛かるとは思います。このサロンと舟天堂と鐘楼(3百万円)を河口の森と共に住民の力で実現したい。

すでにおしゃべりやお話しだけの時は終わり通船川に住民の力とお金が必要な時となったように思います。通船川の再生を単なる夢物語にすることなく、集金、集客、宣伝、バトルというこの社会を構成する主要な力の獲得と共に、夢を語りながら夢を実現する能力が試されていると考えるようになりました。会員皆様の布施をお願いしたい。

通船川草刈隊 横山 通

日本の河川における不連続堤防の変遷と分類に関する研究～その 1

去る三月、私は 10 年間の大学生活をついに終えることができました。今回は、この大学生活の集大成となった私の博士論文について少し説明させていただきたく思います。小難しいこともそうでないこともありますので、何編かに分けてお話させていただくつもりです。

日本の川の多くには堤防が設置されています。堤防は上流から下流までずっとつながっているものが多いのですが、川によっては途中で途切れていたり、一部低くなっていたりするものがあります。河川整備の遅れや必要がないから堤防がない場合もありますが、意図的に堤防が途切れているものがあります。これを不連続堤または不連続堤防といいます。

堤防の性質上、堤防が「不連続」であるということは、堤内側（人の生活側）に洪水が流れ込む場合があることを意味します。そのため、現代の治水の考え方では、川から洪水を溢れさせないために、堤防が途切れず連続であることが望ましいと考えられてきました。つまり、上流山間部ではダムで洪水を貯め、下流平野部は連続した高い堤防によって洪水を川の中だけで処理するという考え方が近年の治水の考え方です。

しかし、近年この治水の考え方では対応しきれない状況が多発しています。治水計画の想定を上回る洪水が多発し、信濃川や利根川のように実現不可能と思われる治水計画が設定されてしまっていること、ダムによる洪水調節の限界が明らかになって来たことなどです。

これらに対応するような形で、流域を総合的に見た治水の考え方や洪水が氾濫したときの対応策などが検討されるようになって来ました。この様なことを踏まえ、近年では上流でのダム治水が中心であったこれまでの治水計画に比べ、下流平野部での治水についても、遊水地や放水路などが積極的に取り入れられるケースが増えてきています。

遊水地とは、洪水が発生したときに流れてきた洪水の一部を貯めることでそれより下流での洪水被害を少なくするためのもので、主に下流の平野部に設置されています。一般的には、川の横に広い区画を確保して堤防などで囲い遊水地としています。遊水地の川側の堤防の一部が越流堤と呼ばれる低い堤防

になっていて、洪水が発生したときに一定以上の水位になるとその堤防の低くなった部分から遊水地内に洪水が溢れて洪水を貯留し、洪水が治まったあとに遊水地から排出する方法が一般的です。

この遊水地の様な下流平野部での治水は、現代よりも戦国時代から戦前くらいまでに盛んに用いられていました。これは上流山間部でのダム治水や堅固で長大な連続堤防をつくれるだけの技術が十分でなかったこと等が原因と考えられます。

不連続堤はこの様な時代に平野部で洪水を処理するための治水施設としてつくられてきました。ただし、単に不連続堤といっても、その形や設置されている場所、機能は様々でした。この様な不連続堤は、実は現在でも多くの川に残っています。例えば、武田信玄が甲府の釜無川（富士川）につくった「信玄堤」は、不連続堤を一部用いた複合的な治水施設で現在でも甲府に行けば見ることができます。「信玄堤」で用いられている不連続堤は一般的には「霞堤」と呼ばれています。

「霞堤」という言葉自体は、明治 24 年に富山県の常願寺川の治水計画に関して論じた、「治水論」という本に記載されているものが最も古いとされています。戦国時代にはあった堤防の形が明治に入るまで特定の名前がなかったことはまだまだ研究の余地があるところですが、この「霞堤」という言葉が、明治以降不連続堤の定義を曖昧にしていきます。

つまり、形・設置場所・機能が異なる不連続堤をすべて「霞堤」と呼ぶようになってしまい、不連続堤がそれぞれの川で、それぞれの場所で違う機能を持って設置されていることが忘れられてしまったのです。その結果、それぞれの川の不連続堤に対して適切な評価がされなくなってしまいました。

そこで、不連続堤がこれまでどの様に取り扱われ、どの様に変化してきたのかの歴史をたどり、どの様な場所ではどのような形や機能をしているのかを分類することで不連続堤の評価を明確にできないかと考えたのがこの研究です。

寺村 淳

（続きは次号に掲載しますが、機会があれば詳細をホームページで紹介します。）

report 11

「第28回全国豊かな海づくり大会」 ～生きている 生かされている この海に～

全国豊かな海づくり大会は、魚や貝などの水産資源を保護し増やすことと、海や河川・湖沼などの自然環境を守ることの大切さをみんなで考える大会で、例年、天皇皇后両陛下がご臨席されています。

第28回全国豊かな海づくり大会



大会ロゴとマスコットキャラクター

第28回新潟大会は、新潟市の朱鷺メッセでの式典行事のほか、海～里～川～森のつながりを感じられる体験教室、新潟の海の幸や県内各地の特色あるメニューの販売などを行い、県内外からお出でいただく多くの皆様に新潟の海のすばらしさを感じていただけるイベントです。

また大会では、海だけでなく、豊かな海へとつづく里、川、森の環境を未来へつなげるために行動する人々を「守(も)り人(びと)」と呼び、大会をとおして守り人の“わ”を広げる活動を展開します。

開催日：平成20年9月6日(土)・7日(日)

開催場所：新潟市朱鷺メッセほか

ホームページ：<http://www.wanoumi.net/>

問い合わせ：第28回全国豊かな海づくり大会新潟実行委員会事務局（新潟県庁内）

電話 025-280-5978

メール yutakanaumi@pref.niigata.lg.jp

世話人 松野 直一

report 12

20周年記念誌小船井編集長顛末記



20周年記念誌制作の苦労話を、という話を承ってこの文章を書いているわけですが、実際のところ、大した苦労はなかった、というのが正直なところでは。

編集者の心配といえば、筆者が締切を守ってくれないとか、原稿にする

ネタがないとか、レイアウトがどうもうまくいかないとか、そんなところだろうと思いますが、今回、わたしはそのような苦労がほとんどありませんでした。さすが20年の実績がある水辺の会、テーマごとの筆者にも事欠かず、分量もきちんと守っていただき（書くことが豊富にありすぎて字数オーバーの方もいらっしゃいましたが、それもまたありがたいことです）、締切も、ほぼ全員の方から守っていただき、発行日が遅れるほど遅れた方は一人もいらっしゃいませんでした。内容も、皆さんの水辺の会への熱い思いに満ちあふれた素晴らしいものばかり。これは編集者の特権とはいえ、本になる前に皆さんのそのようなおもしろい文章を読むことができたわけで、いい思いをさせていただきました。

また、記念誌全体のレイアウトは、新潟日報フリーペーパー「assh」のデザインでもおなじみのデザイナー・上田浩子さんをお願いしましたが、ゆとりのない日程の中で、お忙しい合間を縫いながら、完璧と言っていい仕事をしていただきました。本当にありがとうございました。

個人的にはやはり、大熊会長・内山節さん・篠田昭新潟市長の鼎談が圧巻だと感じていますが、もちろんそれだけではない充実ぶりのこの記念誌を、できれば多くの方々に読んでいただきたいと、心から思います。

小船井 秀一

新潟水辺イベント情報 新潟水辺の会 & 関連団体ほか

5月31日(土)
第5回萬代橋サロン「他門川マーケットの謎を探る」
時間:13:30～16:15、会場:クロスパルにいがた
参加費:500円(コーヒー、お菓子、資料代込み)
内容:昔の他門川周辺の風景を語る(他門川マーケット)の謎を探る?
ゲスト:旧他門川マーケット及び周辺居住者
問合せ:萬代橋ファン倶楽部 090-7414-1634
bbfc.05823.nn@lake.ocn.ne.jp

6月8日(日)
第5回「身近な水環境の全国一斉調査」
詳しくは6ページをご覧ください。

6月13(金)～14日(土)
第24回水郷水都全国会議・東京大会
13日(金)全体会・交流会
14日(土)記念講演、各地からの報告、全体会
会場:国立オリンピック記念青少年総合センター
参加費:約3000円
内容:水郷水都運動の新しい段階を探る-全国水郷水都の体制整備について-
問合せ:水郷水都全国会議
hoko@sui-sui.sakura.ne.jp

6月21日(土)
秋葉湖にカヌーを浮かべて自然を楽しむ会
当会への実施協力の要請イベント(予定)
時間:13:30～、会場:新潟市秋葉区秋葉湖
参加費:未定
問合せ:(社)新津青年会議所 0250-22-0121

6月29日(日)
新潟市環境フェア
場所:新潟市万代シティ

7月5日(土)
信濃川フィールドミュージアム会議
時間:14:00～、会場:長岡造形大学円形講義室(長岡市)
参加費:未定
問合せ:鈴木造園 鈴木 重壺 0258-92-3198

8月23日(土)
KODOMO ラムサール国際湿地交流 in にいがた

時間:9:00～17:00、会場:朱鷺メッセ(新潟市)
参加費:無料
内容:ラムサール湿地の保全について、環日本海圏の子ども達が集まり、KODOMO メッセージを採択し、10月韓国の昌原で行なわれる第10回ラムサール締約国会議に提案する。
問合せ:新潟市環境部環境対策課:
kankyo@city.niigata.lg.jp

9月6日(土)・7日(日)
第28回「全国豊かな海づくり大会」
～生きている 生かされている この海に～
詳しくは11ページをご覧ください。

9月20日(土)
つくり市民会議
時間・会場:未定、参加費:無料
問合せ:新潟県新潟地域振興局地域整備部
TEL/025-231-8302

9月20日(土)～21日(日)
全国ボランティアフェスティバルにいがた 2008
～みんなでつくろう!ボランティアの知恵の輪～
時間:10:00～16:00、会場:朱鷺メッセ(新潟市)
参加費:無料
問合せ:第17回全国ボランティアフェスティバルにいがた実行委員会事務局 025-281-5805

9月26(金)～28日(日)
第1回「いい川・いい川づくりワークショップ」
会場:国立オリンピック記念青少年総合センターほか(東京都)
問合せ:「川の日」ワークショップ実行委員会事務局
TEL/03-3408-2466 FAX/03-5772-1608
<http://www.mizukan.or.jp/kawanohi/kawanohi.htm>

10月4日(土)～5日(日)
しなの川考流会
時間:未定、会場:新潟県下越中越の水辺、岩室温泉(宿泊)(新潟市)、参加費:未定
内容:NPO 法人長野県水辺環境保全研究会と水辺視察及び学習会
問合せ:森本 090-1613-1879

新潟水辺の会「20周年記念誌」

～記憶される美しい水辺へ～好評発売中

新潟水辺の会 20年の記録が満載の「20周年記念誌」
～記憶される美しい水辺へ～が3月1日発行されました。
大熊会長の最終講義及び退職祝賀会に参加された方には記念品として差し上げましたが
それ以外の会員の方にはこの水辺だよりと一緒に送りましたのでご覧ください。

また、会員以外の方もぜひお買い求め下さい。

1冊 500円 + 送料でお送りしますので

ご希望の方は事務局までお申し込み下さい。

編集人:森本利

●事務局からのお願い

インターネットメールで随時会員の皆さんに情報をお届けしています。メールアドレスを新しく持った方、アドレスを変更された方は事務局まで御一報ください。

●発行:特定非営利活動法人 新潟水辺の会

●事務局:新潟市西区みずぎ野 4-7-15 大熊 孝方

Phone 025-264-3191

Fax 025-264-3260

ホームページ

<http://www17.plala.or.jp/mizubenokai/>

メール mizubenokai@plum.plala.or.jp